第25号

令和５年度　長崎市立長崎中学校　学校だより

覚　悟

R6.3.22　発行
校長：種吉　信二

令和５年度の修了式

本日は令和５年度の修了式を行いました。３年生が卒業して体育館が一層広く感じましたが、それぞれの学年の代表が力強く今年度の振り返りを述べるとともに、一つずつ学年が上がる心構えを発表してくれました。

生徒はこの一年間の活動をとおして、また一歩成長を遂げることができました。そんな生徒に向けて寓話「カエルの登山」の話をしました。以下にその内容を紹介します。

（一度は山に登ってみたいと思っていたカエルが１０匹集まった。みんなで一緒に登ろうじゃないかということになって、山のふもとに集合した。しかし、見送りに来た仲間はみんなヤジを飛ばすばかりだった。

「登れるわけないだろ。行くだけ無駄だぜ。やめとけ、やめとけ」。そんな言葉を背に受けながら、１０匹のカエルは出発した。ぴょこぴょこと小さい足で跳ねながら、山に登って行った。

中腹にさしかかったところで、ウサギたちに会った。カエルたちが頂上まで登るんだと言うと、ウサギたちはすぐさまこう言った。「頂上に上る？無理だ、無理だ。この山はものすごく高いんだ。その小さな足で登れるわけないよ！」。これを聞いて疲れ切っていた５匹はあきらめた

残った５匹の前には、一層険しい上り坂が待っていた。やがてモミの樹海に入ると、マーモットと出会った。「頂上まで行くなんてカエルさんには無理ですよ。あまりにも無謀です。とんでもないですよ」。この言葉を聞いて２匹があきらめた。

残った３匹はなおも進んだ。少しずつ、少しずつ、とにかく頂上を目指して進んだ。ぴょこん、ぴょこん、ぴょこんと。やがて今度は高山のヤギが現れ、カエルたちの様子を見て笑った。「この辺で引き返したほうがいいんじゃないか。その様子じゃあとひと月かかったって頂上にはつかないだろう」。ここでまた２匹が脱落した。

とうとう残りは１匹になってしまった。しかし、１匹はずいぶんと時間をかけて、ついに頂上へとたどり着いたのだ。

その１匹が山を下りてくるのを待って、仲間たちはいっせいに聞いた。「いったいどうやって登り切ったの」でもそのカエルはたった一言だけ「何？」と聞き返しただけだった。そこで仲間たちはもう一度大声で聞いた。「どうやってこんな快挙を成し遂げたんだい？」

するとそのカエルはまたしてもこう聞き返してきた。「何？」、「何？」、「何？」

そのカエルは耳が聞こえなかったのだ。）

（「座右の寓話」戸田智弘より）

山に登ろうとしたカエルたちの寓話でした。カエルには二つのグループがあります。一つは見送りには来るが「がんばれ」と励ますわけではなく「やめとけ」とヤジを飛ばすカエルたち。もう一つは山に登ろうと挑戦するカエルたち。

この寓話から得られる教訓には「勇気をもって課題に挑戦しよう」ということがあります。何もしなければ、失敗することもなく傷つくこともありません。その代わり成長も望めません。何かを得ようとすれば、失敗を恐れずに挑戦することが大切です。

山登りに挑戦したカエルたちのグループに目を向けると一匹を除いて挑戦をあきらめました。なぜかというとまわりから「お前には無理だ」という言葉があったからです。ただ一匹、頂上にたどり着いたカエルは、耳が聞こえず他者からの言葉が入りませんでした。だからこそ成功したのです。

なお、ウサギやマーモットはなぜ「お前には無理だ」と言ったのでしょう。失敗してカエルたちが傷つくのを心配したから。また、成功してほしくなかったからでしょうか。もしかしたら、以前挑戦して挫折した経験があるのかもしれません。自分を越えてほしくないと思ったのでしょうか。自分と同じ場所にいてほしかったのかとも考えられます。

ところでみなさんは、この一年、お互いを高め合える集団に成長することができたでしょうか。お互いの挑戦を励まし、支え合える集団になっていますか。４月からは一つずつ学年が上がります。各自が勇気をもって様々なことに挑戦するとともに、挑戦を支え合う、学年集団にさらに成長することを心から願って修了式の挨拶とします。